宗像

大島での中津宮春季大祭の様子

沖津宮・中津宮両宮春季大祭斎行
～筑前大島で、五穀豊穣と豊漁を祈念～

四月十九日、二十日の両日（旧暦の三月十四・十五日）、宗像大社沖津宮・中津宮両宮の春季大祭が、筑前大島の中津宮で斎行された。

大祭の諸準備には、数日前より沖・中両宮奉賛会（古賀理会長）、同敬神婦人部（河辺恒子部長）、並びに同翼賛会（福崎延男会長）に御奉仕頂き、各祭場の清掃、社殿の装飾等装いも整えられた。

四月十九日午後三時より中津宮地主祭を斎行、同五時島の北側にある沖津宮遥拝所、中津宮で宵宮祭が各々斎行された。終了後、社務所で大祭の最終確認を兼ね一同で直会を行い、無事の斎行を祈った。

翌二十日大祭当日は、春麗らかな天候

遷宮で結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

6月祭事暦

毎月1・15日 月次祭
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社祭（1日）
午前11時～
総社祭
浦安舞奉奏（1日）
豊栄舞奉奏（15日）

風滴

大空に鯉幟が悠々と泳ぐ「子供の日」五月五日に、当大社でも皐月祭が行われたのは既報の通り。この日が「端午の節句」と認識している若者が果たしてどれ位だろうか。「七夕」は別にしても「人日・上巳・重陽」などの節句に至っては戦後生まれの世代ではあまり耳にしたことが無いのでは？▼節句とは、「年中行事を行う日のうち、特に重要な日。本来は節日の供物、節供を意味したが、後に節日そのものをさすようになった」と辞書にある。風土に合わせ季節の節目ごとに、神への感謝と地域の結束を図り行事を行う。それが祭事であり、祭政一致を原則とする民族の歴史でもある▼ところが昨今「祭事」が「催事」となってしまった気がしてならない。「祭事」には当然「神」が存在する。しかし「催事」は単なるイベントである。地域文化の発信、あるいは地域興しの手段として、「○○まつり」と称するさまざまなイベントが全国各地で催されている。地方の時代がクローズアップされる今日、それらの「催事」は有効な手段であり意義のあることだと思う▼日本人は「まつり好き」とよくいわれる。国民もそう自覚しているのではと感じる。であるからこそ「まつり」即ち「祭」の語源が「手に犠牲の肉を捧げ、神前に供える」であり、「祭＝神」であることを今一度考えていただきたい。

（M・T）

神具・装束・授与品 井筒
装束店（福岡店） 〒812-0068福岡市東区社領1-12-10-401 フリーダイヤル 0120-055-092 電話 092-651-9456
授与品店（本店） 〒601-8348京都市南区吉祥院観音堂町23 フリーダイヤル 0120-075-820 電話 075-672-8100

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567

に恵まれ、奉仕員、参列者一同各祭場に別れ、午前八時半より宮崎区の厳島神社で、同九時からは沖津宮遥拝所、同九時半より大島最高峰の御嶽山に鎮座する御嶽神社でそれぞれ春祭が執り行われた。

午前十一時からは、島内外より多数の参列者が続々と参集する中、中津宮春季大祭を斎行、神饌と共に島民の真心からなる海川山野の献品・献魚が供えられた神前で、神島宮司が祝詞を奏上。続いて島民を代表し氏子奉幣使田志日佐志氏が奉幣詞を奏上された。巫女による「浦安舞」が優雅に奏された後、宮司以下各界各層の代表者が玉串を奉り、祭典は滞り無く終了した。祭典後には昨年度の献品・献魚奉納者に感謝状が宮司より贈呈された。

献品・献魚奉納者への感謝状贈呈式

その後照会殿にての直会となり、まず当社宮司より挨拶を行い、次に本年四月に島内にて運行が始まったみなとタクシー㈱古野浩代表取締役社長より来賓挨拶を賜った後、氏子奉幣使田志日佐志氏の発声で乾杯、一同玄海の海の幸に舌鼓をうちながら賑やかな一時を過ごした。

午後一時三十分からは、神賑行事として島内小学生による奉納相撲大会が、本殿横の土俵で開催され、境内には大きな歓声が響き、一層の賑わいを見せていた。

大島での春秋大祭をはじめ各祭典、諸行事は全島挙げて行われている。活気に溢れる中、五穀豊穣と豊漁を祈る沖・中両宮春季大祭は盛大裡に終了した。

また沖・中両宮春季大祭に際しまして、御協賛賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

氏子奉幣使を奉仕された田志日佐志氏

賑わいをみせた相撲大会

宗像大社氏子青年会・玄海未来塾
沖ノ島で清掃奉仕

五月二十一日、「宗像大社氏子青年会（会長＝小林栄二）」及び、地域まちおこしボランティア団体「玄海未来塾（代表＝小林正勝氏）」の会員、塾生三十四名が参加し、沖ノ島の清掃奉仕が行われた。

この行事は、年に一度約二三〇名の一般参拝者を受け入れる「沖津宮現地大祭」を迎えるにあたり、毎年実施され本年で九回目となる。

今年は前日の十九日が当初の予定日であったが、海上時化のために一日順延され、翌二十日沖ノ島に向かった。

今年御奉仕いただいた塾生・会員の皆様

前日の余波でまだ波が高い状態の中ではあったが、無事に沖ノ島に到着。一同直ちに海水で禊を行い、島の中腹に鎮座される沖津宮へ向かった。

沖津宮本殿で奉告祭を斎行し、清掃作業を開始。本殿の屋根に積もった枯葉を落としたり、参道の整備、社務所前の上陸心得標示板修復など、平素勤務している一名の神職では困難な作業を約二時間行った。

奉仕作業後、一行は波止場で直会を行い賑やかに労った。

帰路は波も穏やかになり、出港後には島を一周、沖ノ島の幽玄な景観を拝した後、一路玄界灘を進み、夕刻には無事神鐘崎港に到着、本年の奉仕作業を無事に終えた。

奉仕作業の様子

五月・浜宮祭斎行

新緑の五月五日こどもの日、恒例の五月・浜宮祭が当大社五月寮で斎行された。

本来ならば宗像市神湊の住宅街に鎮座する浜宮と同市江口に鎮座する五月宮の神前で執り行われるが、浜宮祭斎行時刻直前、生憎の雨模様となり急遽五月寮での同時祭典（遥拝）となった。

五月寮の一室に祭壇を弁備、御神前に海川山野の味物に加え「赤飯」「粽」「ガメの葉饅頭」「菖蒲酒」など端午の節句を象徴する神饌をお供えし、午前十一時より神島宮司以下神職四名奉仕のもと祭典を斎行。

当大社責任役員清水正敏氏、松井参伍氏、安部照生氏子会長、地元総代をはじめ神湊・江口両地区の各自治会長、園田勲玄海少年自然の家所長外地元の崇敬者多数が参列した。

祭典終了後、同所にて直会が催され、神島宮司より五月・浜宮祭の由緒を交えた挨拶があり、参列者一同連綿と受け継ぐことの大切さを感じつつ菖蒲酒で乾杯。楢の若葉が敷かれた折敷に盛られた赤飯、がめ煮・膾・粽を古式ゆかしく栗箸でいただきながら、神人和楽の一刻を過ごした。

今から約六〇〇年前の当大社の祭事記録によれば、この五月・浜宮祭について、海上に社殿を設ける浮殿造りの「濱殿」という御旅所が江口浜（河口）に設けられ、五月五日この濱殿へ田島宮（現＝辺津宮）から、三宮（沖・中・辺津宮）と許斐宮（宗像市王丸）、織幟宮（宗像市鐘崎）宗像五社の神輿が御神幸したこと。また本来の早苗月の信仰に外来の節句が相重なり、中世におけるその祭事では田植神事・田楽に加え、京風の競馬・流鏑馬・真弓（歩射）等も行なわれており、その様子は秋の「放生会」に対し「五月会」と呼ばれる程の賑わいをみせていたこと等が記されている。現在の浜宮・五月宮いずれも、当時「濱殿」が置かれた地と推察されている。

中世に隆盛を極めたこの祭事も、宗像大宮司家の断絶等により江戸期に中絶されたが、昭和三十八年五月五日、三〇〇年振りに再興され今日に至る。社報「宗像」二十九号（昭和三十八年六月一日発行）に、宗像郡内の神職・総代が奉仕し、十二体の神籬が刺し立てられたこと、一五〇人の参列があったこと、浜宮祭終了後、みあれ祭の御座船と同じく紅白の「吹き流し」を靡かせ、五月宮まで陸上神幸したこと等、当時の様子が掲載されている。

稲の成長を予祝する神事でもあるこの五月・浜宮祭が終わると、神群宗像では田植えの準備が始まり、一面の水田に早苗が影を浮かべながら夏へと木々も緑を深めていく。

平成二十年度 宗像大社奨学金受給生奉告祭
～第四十九期生となり、受給生は延べ七七五人に～

四月二十九日昭和祭で賑わう御本殿で、平成二十年度宗像大社奨学金受給生奉告祭が斎行され、本年度の受給生約六〇名が御神前に集った。

当日は、今春入学した新受給生二十名を含む、宗像・福津両市内より選定された生徒約六十人が保護者とともに参集。午前十一時からの昭和祭に参列後、拝殿に昇殿し奉告祭が斎行され、一同有為な人材になるよう勉学に勤しむことを御神前に誓った。

祭典後は清明殿で選定書授与式と説明会が行われ、神島宮司から宗像大社奨学金選定書が生徒の代表に授与され、担当神職よりこの奨学金の歴史、制定目的、規定、受け取り等についての説明が行われた。

その後、生徒一人一人がテーマに沿った作文を執筆し、書き終えた生徒から第一回目の奨学金支給を受け、境内をあとにした。（この作文は『奨学金受給生便り』として紙面で掲載する予定です。）

当大社の奨学金制度は、昭和三十四年の今上陛下御成婚を奉祝して制定され、翌年の昭和三十五年第一期生として宗像市・郡内の中学校出身者（当時は六中学校）に支給され今日に至っている。現在では宗像・福津市内十中学校より各校二名づつ選定し三年間支給しており、今春の新受給生二十名で延べ人数は七七五人にのぼる。

『郷土を愛し、将来の日本を背負う有為な人材の育成』（宗像大社奨学金受給生規約より）の制定の趣旨にそった社会人になることを切望する。

本殿での奉告祭

宮司より選定書を受け取る受給生代表

第49期新奨学生20名は下記の通り

田志　麻美	（大島中卒）
船越　千帆	（　〃　）
北崎　美理	（玄海中卒）
星　愛梨	（　〃　）
下薗　優也	（日の里中卒）
井上　優佳	（　〃　）
井上　佑太	（宗像中央卒）
古賀絵里世	（　〃　）
池田恵利香	（城山中卒）
福原聖一朗	（　〃　）
松田　章吾	（河東中卒）
吉田　瑞紀	（　〃　）
中井　朗	（自由ヶ丘中卒）
廣橋　貴明	（　〃　）
七田めぐ美	（津屋崎中卒）
古川　璃奈	（　〃　）
山田　健太	（福間中卒）
古場　茜	（　〃　）
井上　隼	（福間東中卒）
岡本　玲子	（　〃　）

宗像大社菊花会 玄海小学校に菊資材を贈呈

五月八日地元玄海小学校体育館で、宗像大社菊花会(千々和正信会長)からの菊資材贈呈式が行われ、当大社の神職・巫女から児童代表へ植木鉢や肥料などが手渡された。

同校では毎年児童の情操教育の一環として、児童・教員・PTAが一丸となって菊作りに取組んでおり、当大社もその活動に賛同、児童の豊かな心を育む一助になればと協力し、今年で九年目となる。

資材を受取った児童代表は、お礼と共に「昨年から大輪三本仕立てに挑戦しています。今年は昨年よりもっと大きく、綺麗な花を咲かせるよう皆でがんばります。」と抱負を述べた。

その後、菊作りの指導にあたっているボランティア団体「匠の会」の大森正史会長から「玄海小学校で一緒に菊作りを始めて今年で九年目となります。来年は十周年となり記念事業を考えていますのでそれに向けて今年はより一層がんばりましょう。」と挨拶があった。

翌日からは早速、匠の会の方々と菊作りが始まるようである。秋には児童たちが一生懸命育てた菊が校内菊花展をはじめ、当大社境内で行われる西日本菊花大会、地元の各施設などで飾られ、多くの方々の目を喜ばせるだろう。児童が丹精込めて作る菊がどのような花を咲かせるのか今から楽しみである。

奨学金受給者からの便り

昨年度まで当大社奨学金を受給され、今春就職された第46期生の方と、第1期生で故人となられた方のご主人から、先月お手紙が届きましたので、ご披露させていただきます。

第46期生（平成17～19年度）
女性

早秋の候、宗像大社様におかれましてはますますご繁栄のこととお慶び申し上げます。

さて、平成17年より宗像大社奨学金をいただいておりました。私は、この度3月1日をもちまして、無事に香椎高等学校を卒業致しました。

そして4月1日からは、古賀市役所に勤務致します。私といたしましては、受給生説明会の時の作文執筆で、「公務員になりたい」と書いていたので夢を実現でき、大変嬉しい限りです。

奨学金受給生だったことの名に恥じぬよう、これからは地域の皆様に貢献できるよう頑張っていきたいと思います。

これからも宗像大社様のますますのご繁栄と、皆様のご健康をお祈りいたします。

本当にありがとうございました。

3月1日

平成20年 香椎高校卒業

第1期生（昭和35～37年度）
女性のご主人

春暖の候、貴大社ますますご発展のこととお慶び申し上げます。

貴大社では長年、高校生に対する奨学金事業を継続され、多数の高校生がその恩恵にあずかったとお聞きしています。

私の妻もその一人で、貴大社の奨学金をいただいたお陰で宗像高校を無事卒業できましたことを、日頃から大変感謝いたしておりました。

残念ながら妻は昨年永眠いたしました。故人の遺志によりささやかではますが貴大社の奨学金事業に寄付させて頂ければ幸いです。

突然で失礼かと思いますが、ご受納いただきますようお願いいたします。

寄付金　20万円

4月7日

昭和38年 宗像高校卒業

九州国立博物館沖ノ島祭祀コーナー
～第六期展示品を公開～

九州国立博物館（以下、九博）の常設展示にあたる文化交流展示室では、開館以来、沖ノ島祭祀遺跡出土品展示コーナーが設けられており、半年ごとに内容を替えながら、国家による沖ノ島での宗像三女神への奉斎について紹介している。去る四月二十一日、展示の入れ替え作業が行われ新たに第六期展示品が陳列された。

第6期の展示風景

今期の展示品は、古代日本の最高傑作ともいえる銅鏡、神祭りには欠かせない鉄製の刀や翡翠の勾玉などの玉類、朝鮮半島製の金銅製歩揺付雲珠と鉄斧、宮廷祭祀のあり方を物語る鉄製工具（刀子・斧・鑿）のミニチュア、装飾豊かな須恵器など、合計六十九点（ネックレス状の玉を一連として数えた数字）。これまでと同様、韓国竹幕洞祭祀遺跡出土品と併せて紹介されている。

九博ホームページによると、文化交流展示室は同館に課せられた「日本とアジアとの文化交流史の展示」を展開する空間であり、そこでの重要な目的は展示品が辿ってきた文化交流の道すじに思いを馳せる場を提供することであるという。古墳時代、我国と東アジアとの交流において精神的支柱となった宗像三女神と沖ノ島、そこに着眼し紹介する企画は九博が追求する展示の意義を深めるものであるといえよう。第五期展示からは、展示コーナーにおいて、沖ノ島祭祀遺跡出土品の解説や当期の展示目録を表したリーフレットの配布が始まった。今後、展示替えの度に作成していくという。より多くの方々に興味をもって頂けることとなるだろう。

展示替え作業の様子

展示解説リーフレット
（写真は第5期のもの）

■金銅製歩揺付雲珠

■脚付有孔坩

■半円方形帯画像鏡

(続) 浜の寄物

226

いしい ただし

東北の旅で、もう一つ印象深かったのは、八戸にある櫛引八幡宮であった。タクシーに乗ったら、運転手が「是非」と勧める。

市内の西南方にあり広大な社域には、杉の老木が立ち並び、荘厳な雰囲気が漂っている。

誉田別尊・旧郷社。

社伝によると、中世以降この地方を支配した南部氏の遠祖、加賀美次郎遠光が、仁安元年(一一六六)甲斐国(山梨県)巨摩郡南部の庄に創建した。その後、源頼朝の奥羽地方平定に従った戦功により糠部五郡を送られた南部光行が建久二年(一一九一)いまの十和田市滝沢に勧請し、さらに貞応元年(一二二二)櫛引村に移されて、櫛引八幡宮と呼ばれるようになったという(日本の神々・東北)。

境内には拝殿・本殿・南大門等九殿がある。本殿は慶安元年(一六四八)の造営で、延享年間(一七四四~四七)に大規模な修理が行われている。三間社流造の本殿は全体に黒漆塗りで均整もよく、破風の傾斜は美しい曲線をなし各所の彫刻もすぐれた手法が見られる。拝殿は入母屋造り、南大門は四脚門切妻屋根である。

宝物館に入ってみよう。国宝の甲冑がある。天明八年(一七八八)当社を詣でた古川古松軒は東遊雑記の中で、「この社に宝物数多にて、右のうちに新羅三郎義光公の甲冑あり。惣金の銅物にて、あたりも輝くばかりなり。なかなか当世にては、黄金をかくのごとく入れて製すべきことにはあらず。古はよくよく黄金のたくさんなることにして、かかる甲冑を製せしことならんと、人びと目を驚かせしことなり(中略)噺し伝えにもかく黄金のみ製せし甲冑あること聞かず。ゆえあるべし。外にも三領あり。よき甲冑なり、太刀も多く。餝りも念の入りし拵えなり。宝物の数かずありて真物のよきものばかり、揃いし所は、江戸を出でしより当八幡宮の宝物第一にて、世にもめずらしき物を一見せしことなりし」と絶讃している。

赤糸威鎧(あかいとおどしよろい)は、鎌倉時代末期の作、長慶天皇御料と伝えられる。「ほとんどあますところなく装飾された菊籬金物の意匠は精緻をきわめ、技法もまた峻勁であって、鎌倉末期における金工芸術の特色を最もよく発揮せるものといってよい。春日大社の竹に雀虎金物の「金糸威鎧」と共に、装飾金物の豪華な点において現存甲冑の双璧である」(原色日本の美術)

白糸威鎧は卯の花威の鎧と称され、南北朝時代の作で、後村上天皇から南部家七代信光が拝領したものと伝えられている。他に国指定重要文化財の紫糸威鎧もある。

◀白糸威鎧

◀赤糸威鎧

第五六二回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日〆切

宗像市 大島 杉田 禮子
参道に集ひてくれし人々の笑顔に向きて古希の餅まく

〔評〕島の風習だろうか、ほのぼの感の漂う一首。作者にはまだ未来がある。

北九州市 八幡西区 吉田ウト子
苦瓜の苦味きりっと喉元をさしゐて今朝の青き感触

〔評〕二句の「きりっと」との重複感はあるが、「青き感触」と表現する若々しさに拍手。「苦瓜の苦味」のリフレインも巧みである。

宗像市 田久 井上 光
傘寿過ぎしいのち尊び生き抜かむ三年日記買ひきて書き継ぐ

〔評〕杉田さんより十歳年長者の生きる上での覚悟。「書き継ぐ」がいい。

福津市 中央 中村 勇
朝刊の短歌、俳句を読み終り老人ホームの朝食に行く

〔評〕井上さんより更に一廻り年上の中村さんの在るがままの姿である。

宗像市 田野 森 甲子
玄関に置きし黄色の蘭の花はや株元に若芽を抱く

〔評〕ここには蘭の逞しい生命力があり、それに励まされている作者がある。

福津市 中央 池浦千鶴子
散る花も蕾もありて公園は年に一度のはなやかさにある

〔評〕花は桜である。桜への讃歌であり、己への生命の投影でもある。

宗像市 光岡 則松 芳子
青空と満開の花調和良く風に散り初め川面を彩る

〔評〕これも桜へのよろこびのうた。桜は正に花の王である。

宗像市 田久 巻 桔梗
須臾の間の昂りのあとを水の面に残して鯉ら身を沈めゆく

〔評〕産卵期の鯉のうごきをうまく描写している。上句の「の」のつなげ方がいい。

宗像市 日の里 大和美由紀
囀りの昂る刻を公園に飼犬連れて体操に行く

〔評〕この一首には繁殖期の小鳥達を添景として作者の日常の一齣が詠れている。

福津市 若木台 野間 精一
八十を超えし媼が百歳の母と連れ立ち桜見るとぞ

〔評〕長寿と桜、日本ならではの風景であり、それに感動している野間さんである。

うきは市 浮羽 向 則正
期待して幼と来たりし動物園パンダはいつまでも背をむけしまま

〔評〕上野動物園のリンリンが亡くなった。子供にも大人にも愛されるパンダにはパンダの生き方がある。作者もそれは納得しているだろう。

福岡市 南区 井田有久衣
病室をそっと抜け出し自販機でコーヒー求め朝の一杯

〔評〕賞て「夜明けのコーヒー」と言う青春を讃歌する歌が流行したが、このコーヒーは老いを慰めてくる一杯である。

福岡市 星ヶ丘 佐々木和彦
補修工事済みたる池に鴨ら戻りおのおの静かに波紋を作る

〔評〕三句以下「鴨たちは戻りおのおの波紋を作る」として、「静か」を省きたいと思う。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子
行きがけに話のはずむ主婦ら見て帰りに通ればまだ話しおり

〔評〕主婦たちの間では、ガソリンの価格、桜のことなどなど話題はつきなかったのだろう。うららかな春の日差しにつつまれて。

北九州市 戸畑 田中ハツセ
結納の孫を祝ひてえびね蘭五本伸び立ち綻び初めぬ

〔評〕「祝ひて」と断定せずに「祝ふや」とした方が、余情が出る。

福岡市 南区 加野シノブ
志望校目指したる子は合格し花咲く校門くぐりて行けり

〔評〕志望校に合格することは人生最大の喜びかも知れない。少し直しました。原作とくらべて見て下さい。

選者詠 青海島通港

解体場跡を見下ろす島の寺賽銭箱に鯨を刻む
鯨墓詣できて見る鯨館とどめ刺す絵図、道具を展示す
銛あまた刺さりし勢美鯨がからまりし網のなかにて血を吹く処

第五三七回 俳句作品集

宗像市 東郷 田中 憲象
日章旗はためく学校花の日々

宗像市 光岡 白土 凌一
葉桜に何やら淋し胸の内

宗像市 日の里 花田いつ枝
一ト雨や桜落着く色となり

編集後記

約五ヶ月振りに沖ノ島へ行ってきました。基本的に島ではたった一人の時が多いのですが、季節や時期によっては大島・鐘崎の漁師さんを中心に、一人または二人で船に乗り、建網や延縄漁を行なう船が停泊します▼さらに今回は数隻で巻網漁を行なう船も、最も多くの船員が乗る「本船」と呼ばれる船が何隻も入港してきました。原油高による移動コストを抑えるためです▼島に入港した船は必ず「拝んどって～」と献魚をし、時には船に呼ばれて夕食を共にします。話題はもっぱら、漁の話ですが漁師さんとコミュニケーションを図る貴重なひと時となっています▼海洋資源の減少、海水温上昇による影響、そして原油高と漁師さんを取り巻く環境は一層厳しさを増し、漁師を継がせない、継がせることが出来ないと深刻なようです▼漁師さんが「田島」と呼ぶここ辺津宮は、ここ一〇〇年で「車祓」の神社として躍進してきましたが、宗像三宮は古代からこの海の民とも共に歩んできました。大切なことは「今」と「これから」ですが、海神と海人の歩みにも「今」と「これから」があることを、見つめ直させる今回の勤務でした。 （M・O）

発行所 宗像大社社務所 宗像会
〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311（代）
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ
毎月1日発行 定価1年送料共1,000円